

悪魔の覚醒録

セバスチャン

発現の章

ある日の夕暮れ時。

曇り空の下を、一人の若者が自転車を押して歩いていた。

「……はあ」

疲れた顔でため息をつく彼の名は成世拓実。

ごく普通のフリーターである。

なぜ彼が自転車にも乗らずわざわざ歩いているかというと、

バイトを終えた帰り道に前タイヤがパンクしたせいである。

家まではまだ遠く、体力ばかりが一方的に減っていく。

それでも拓実は歩き続けるしかないのだった。

やがて、家の近くの交差点が見えてきた頃。

「ん？」

今何か、顔に当たったような。

そう思って見上げた顔に、冷たいものが当たる。

それが雨粒だと気付いた直後、勢いよく雨が降ってきた。

「わっ、くそっ！」

慌てて辺りを見回すが、ここらは田舎で建物自体が少ないため雨宿りできそうな場所はない。

しかたなく雨中を走りだしたが、交差点で横断歩道の赤信号に通せんぼされる。

上昇する服の湿度に比例して、イライラが募っていく。

ええいまだか。

それからやっと信号が青になって白線の上に駆け出したその時。

トラックが、左の方から迫ってきていた。

反射的に目をつぶる。

死んだと、思った。

雨の降る音がする。

「ば、ばかやろうっ」

声がする。

え？

まぶたを開くと、目の前にトラックが現れた。

.....俺、まだ生きてる？

「おいっ」

「へ？」

見上げると、運転席からおっさんが真っ赤な顔を出していた。

「危ないだろお飛び出したりしてえ」

「あ、す、すみません」

「早くどっかいけ、邪魔なんだよ」

クラクションを鳴らしまくるおっさん。

「.....」

どうやら九死に一生を得たようだ。相手が直前でブレーキをかけたのだろう。

俺はひとまず自分が生きていることを認識すると、急いでその場を離れた。

家に着くと、ドアの鍵を開けて中に入る。静まり返った屋内にその帰りを迎える人はいない。

まあ、一人暮らしだから当然だが。

拓実はずぶ濡れの服を脱ぎ捨てると、タオルで体を拭いてジャージに着替えた。

それからソファに腰かけ、テレビリモコンのスイッチを押す。

しかしテレビはつかなかった。何度もスイッチを押してみるが反応なし。

たぶん電池が切れてるんだな。

そう思い、腰を上げるとテレビのスイッチに手を伸ばす。

だがそこで、拓実は動きを止めた。

...背後から、確かな視線を感じる。見られている。誰かが近くにいるとしか思えない。

心臓の鼓動が、自然と早くなっていく。

「あら、気付いたようね」

女の声だ。聞き覚えはない。というかこれはもう間違いなく誰かいる。

「やっぱり目覚めたせいかしら」

「だっ、誰だ」

そう言っておそろおそろ振り向いた拓実の目に映ったのは.....

たくましい、腕と脚。

分厚い胸板に、割れた腹筋。

ことごとく引きしまった、その肉体。

全身タイツを着たムキムキマッチョなお兄さんが、そこにいた。

ちなみに短髪だ。

「初めまして♪」

先ほどの女声を発するマッチョ。

宣告の章

そのあまりのギャップに、拓実は凍結していた。

何だこいつは。

変態とかそういうレベルではない。人とすら思えない。

彼のショックが伝わったのか、マッチョは落胆した表情になる。

「あ〜、またこの反応かあ……」

そんな顔されても困るって。

というか何でこいつは家の中にいるんだ？鍵は全部閉めていたはずなのに。

そこである単語がひらめく。

これは、もしや。

「……も、もしやあなたは、ゆ」

「失礼ね、幽霊なんかじゃないわよ。まあ、人間でもないけど」

人間じゃ、ない？

「じゃ、じゃっ、ああんたはいったい」

「落ち着いて。私はただの悪魔だから」

「……」

悪魔、だって？

「あ、しまったつい口が……まあいっか、その方が話は早い」

もう訳が分からない。

とにかくこの極限に変な奴を追っ払おう。

「ど、どっかいけ、俺はそんなのと関係ない」

「あら、関係なら大アリよ。だってあなたは半分悪魔なんだから」

かくして俺の両目は点となる。

それを見て、マッチョはなるほど、といわんばかりの顔をした。

「やっぱり、まだ気づいてないようね」

「へ……？」

「なら教えてあげる」

そう言って俺に指をさす悪魔さん。

「今日、自宅へ帰る途中でトラックにひかれそうになったでしょ？」

「……そうだけど」

なぜ知っているのだろうか。

「あの時トラックの運転手は泥酔状態で居眠り運転をしていた。

普通に考えれば衝突でもしない限り止まるわけない」

知らなかった。でも言われてみると、そうかもしれない。顔真っ赤だったし。

「けど、あの時あれは確かに止まった。当然ブレーキも衝突もなしに。どうして？

答えはひとつ」

「それは、いったい」

選択の章

「あなたはその瞬間、生命の危機感という強いショックで“悪魔の力”に目覚めた。

あれが止まったのはその力によるもの」

力に、目覚めた？

「じゃ、じゃあ……それで俺が悪魔だと？」

「半分よ。半分」

信じられない。

例えそれが事実だとしても、この筋肉、いや悪魔は俺にどうしろというのか。

まさかこのことを伝えに来ただけではあるまい。

「もちろん、それでおめでとうって事にはならない。今はまだ“不完全”。

その証拠に、あなたの寿命はもう1週間で切ってる」

「え？」

突然の宣告に、頭が真っ白になった。

悪魔はニヤリとする。

「力に目覚めた人間は、まず体の半分が悪魔となる。でも接する二つは対する存在。

初めは均衡を保つけど、そう長くは続かない」

……つまり。

「どうすれば、いいんだ」

「死にたくなければ。完全なる悪魔と成ること」

「このままじゃ、だめなのか？」

「“ハーフ”には限界がある。時がたてば均衡は崩れ、その体は朽ち果てる。

……道は二つよ。生か死か」

「そんな……」

拓実は頭を抱えてうつむく。

悪魔になれとかどうかしている。だが、きっぱりNOとは言い切れない。

こんな奴が現実にいる以上、その話も全くの嘘とは思えないのだ。

もしここで、悪魔になるのを断ったとしても。

この事は記憶の片隅に残り、死の恐怖に怯える一生となるかもしれない。

それは嫌だ。絶対に。

なら俺は……いや、でも……

しまいには唸りだす人間を見て、悪魔は口を開く。

「定めなさい。あるべき道を」

その直後に、彼は顔を上げた。

「決めた。悪魔になってやる」

「それは本心？」

「死ぬなんてゴメンだからな」

「うん、ごもつとも。了解よ」

そう言って、太い親指を立ててウィンクする悪魔さん。ギャップは未だに激しい。

「あ、そういえば私まだ名乗ってなかったかしら？」

少し考え、うなずく。

「じゃ、改めて自己紹介するわね。私の名前はクラン・ゼン。こう見えても悪魔よ。

呼び名はゼンでいい」

「俺は成世拓実。こう見えても人間と悪魔のハーフだ」

「ふっふ、知ってるわよ」

「呼び名は拓実で構わない」

「いいえ、悪いけど呼び名は私がつける。これは決まりだから」

「へえ。じゃあカッコイイの頼むよ」

ゼンは目を閉じ、開ける。その間2秒。

「決めた。あなたの呼び名は“ベイス”ね。覚えておいて」

「分かった。じゃあ今後よろしく、ゼン」

「よろしくね、ベイス」

互いの手が差し出され、握手をする。

それが終わると、拓実改めベイスはさっそく質問した。

「それで、悪魔になるにはどうしたら？」

彼にはもはや、先ほどの名残はない。

ゼンは答える。

「まずは一刻も早く“力”を増大させることよ。敵はあなたを待ってくれない」

「敵？」

「そう、敵。“ハンター”と呼ばれる奴らがいてね、あなたのような“ハーフ”を狩るのが仕事」

それを聞いて、ベイスは動揺する。

「ど、どうすんだよ……」

「大丈夫。“リーダー”の名にかけて私が奴らの思い通りにはさせない。

どんなハンターが来てもいいように、私があるあなたを限界まで鍛えてあげる」

その姿で鍛えてやるとか言われても、ムキムキマッチョにされるとしか思えない。

いや、それより。

「俺が、そのハンターと戦うのか？」

「そうよ。悪魔となるには、ハンターを倒して“力”を証明しなければならない」

そんな試練があったとは。

「……大丈夫かな」

不安げにつぶやくベイス。

その肩に、ゼンのゴツイ手が乗る。

「あなたの力は“基礎”。空間を制する能力。その可能性は無限」

始動の章

「それは、どうも」

「分かったら始めるわよ」

「え、何を」

「とぼけないで。悪魔になるんでしょ？」

そういうことか。

さっそく鍛錬とは、えらく気が早い。

「……よし、やってやる」

これから何が待ち受けるのか。

自分はいったいどうなるのか。

明日の命すら分からない。

でもこれは運命なのだろう。

この先は、私たちだけの秘密。

そうささやく声をする。

遠くの空で、雷が鳴っていた。

人気のない真夜中のアーケードで、ベンチに座った中年の男が新聞を読んでいる。

しばらくして、男は新聞を畳むと腕時計を覗きこんだ。

時刻は11時59分。日付の変わりはまだ近い。

やがて全ての針が12を指したその時、急に全ての街灯が消えて辺りは闇に包まれた。

だが男は一切動じることなく、言葉を発する。

「来たな」

そして右を向き。

「そこか」

誰もいない。

「ここだ」

男の頭の後ろ、正確には左隣から声がしたので振り向く。

暗くて顔は見えないが、そこには確かに誰かが座っていた。

男は「誰か」に話しかける。

「待ってたよ」

「そうかい」

「リーダーはどこだ」

「……さあね」

三者の章

直後に、男は左手を突き出すが「誰か」は彼の向かいに立っていた。

男が立ち上がり、二人は相對する。

「ならば、力づくで吐かせるまで」

「やけにリーダーにこだわるな」

「……お前らを何度潰しても、また同種が出てきてキリがない。もうたくさんだ。

よって、私は原因を絶つことにした」

「何っ？」

「リーダーさえ消えれば、お前らが目覚めることもない。そうだろう？“悪魔の卵”よ」

そう言って男が指をさすと消えていた街灯の一つが点き、向かいの「誰か」を照らしだす。

そこには、一人の若者が立っていた。

若者は口を開く。

「お前が“ハンター”のランズだな」

ランズと呼ばれた男のそばにある街灯が点き、その姿が現れる。

「いかにも。ところで、君は誰かな？」

「俺は“ベイシス”。あんたの標的だよ」

「ふむ。……なあベイシス君、私は無駄な争いを避けたい。せめてリーダーの名前だけでも——」

(……ふっふ、お呼びかしら？)

不意に女の声が響く。

「っ!？」

ランズは驚いて辺りを見回すが、ベイシス以外の姿はない。

「……誰だ」

(まあだ分からないの?)

再び声が響き渡る。

「その声は、悪名高きクラン・ゼンだな。……まさか、お前がリーダーか？」

(正解。私がこの子のリーダー♪)

「人間を墮落させる悪魔め。今すぐ姿を現せ！」

(今はお断り。けど、場合によっては後で出てきてやってもいい)

「……。一応、聞いておこうか」

(あなたが私のベイシスを倒せたなら。その時は堂々と現れてやるから後は好きになさい)

「つまり、奴が負ければお前も道連れってわけか。……鵜呑みにはできないな」

(ご心配なく。この約束は保証する)

「……よし。ならいいだろう。お前らの命は夜明けまで持たないと思え」

(それはどうかしらね……?)

それっきり、声はしなくなった。

ランズはベイシスの方へ向き直り。

対決の章

「まあ、そういうことだ。ところで君の“力”は何かな？」

「俺の力は“基礎”。それだけ言っておく」

「ほう、それは珍しい。ちなみに私の力は“天地”だ」

「俺は、お前を倒して悪魔になる」

「させるものか」

二人が構えると同時に、全ての街灯が点灯し、元の明るさを取り戻す。

闘いの幕は開いた。

直後に、地面が隆起してベイシスは土の壁に四方をふさがれる。

ランズは空中へ飛び上がり、土壁に向けて巨大な火の球を放った。

避けられない。

そう悟ったベイシスは地下水を引っ張り出して土壁を泥水に変えると、火の球目がけて土石流を噴き上げる。

両者の攻撃はぶつかり合い、大量の水蒸気が発生した。

ランズは水蒸気を凝縮して無数の氷塊を造ると、ベイシス目がけて次々に飛ばす。

だがその相手も同じことをしていたので、相殺の嵐が始まった。

氷の粉碎する音が絶え間なく響き渡る。

間もなく攻撃は止んだが、両者とも全くの無傷だった。

「“不完全”としてはまずまずだな」

ランズが言う。

ベイシスは一息ついて口を開く。

「言ってる。それより——」

「何だ」

「あまり派手にやると人目につかないか？いくら夜中でもさ」

「ふっ、下らん」

ランズが言い捨てた直後、周りの建物が炎に包まれる。

「ここはすでに別空間だ」

「.....なるほど。だったら」

彼は一瞬言葉を切り。

「好き放題やらせてもらう！！」

「私がな」

その瞬間、ベイシスは後ろに吹っ飛んだ。

慌てて体勢を立て直すが、腹部に強い痛みを感じた。

見ると、服が一部消し飛んで火傷した腹が露わになっている。

ランズは続けてパンチを飛ばしてくる。

ベイシスはそれを避けるが、直後に顔に一発食らうとそのまま殴られ続けた。

戦局の章

その様子は、はたから見ればまるでボクシングのよう。

十数発ほど食らったところで、ベイシスは荒ぶる拳を掴んで止める。

彼の服はボロ切れ同然、体は火傷だらけだった。

それを見て、ランズは驚いた顔をする。

「私の“白熱拳”を食らっておいてその程度で済んでいるとは……」

「俺は、しぶといんでね」

「だがそのままではいられまい。どうする？」

ランズの拳は超高温で白熱している。ベイシスの限界は近かった。

それでも彼はにやりと笑い。

「見てな。ペッ！」

特大のツバを吐いた。

ツバはランズの顔に直撃。

「なっ!？」

ベイシスはその隙に相手を蹴り飛ばして距離を置くと、両手を突き出す。

「この野郎!!」

ランズは反撃しようとしたが、体が動かなかった。

「ぐっ!？な、なぜ」

「“見えざる糸”だよ。お前はすでに操り人形だ」

ベイシスが突き出した腕を横に動かすと、ランズも横に動く。

「よし、動作に異常なし」

「ま、待て、何を」

「ふんっ！」

ベイシスが両腕を左に振ると、ランズは炎上する建物に突っ込んだ。

そのまま彼は向きを変え、腕を無茶苦茶に振り回す。

「うううおおおおおおおおお!!!」

壮絶なる破壊音が絶え間なく響き渡る。

「まだまだ!!」

彼が両腕を振り上げると屋根から人が勢いよく飛び出した。

しかし直後に吹っ飛んだ瓦礫が脳天に直撃する。

「がっ!？」

その際力の制御が切れてしまい、ランズは真っ逆さまに落下する。

地面が、揺れた。

しばし呆然とするベイシス。

「……」

「こ、この……」

ランズの苦しげな声が聞こえる。まだ死んではいないようだ。

とりあえず、強気に出してみる。

「お、思い知ったかこいつめ」

「思い知るのは、お前だ……」

そう言って、ランスはゆっくりと立ち上がる。

「……地獄を、見せてやる」

「何のつ——うわっ!？」

急に激しい地震が起こり、地面から何かが飛び出す。

その正体に、ベイシスは目を見張った。

「私の力を突き詰めれば、何ができるか？」

奴の力の究極。灼熱の“天”と広大な“地”の結集体。

「溶岩だよ。消え去れ」

それは間もなくベイシスに降りかかる。

辛うじて彼は避けたが、今度は足元から噴出してきた。

もはや、ひたすら逃げ回るしかない。

「どうした。俺を倒して悪魔になるんだろう？」

ランスが煽ってくる。

「そうさ！お前は俺にやられる運命なんだよ！！」

ベイシスは逃げながら言い返すが、直後石につまずいて転んだ。

その途端、溶岩が四方八方から飛んでくる。

もはや逃げ場はなかった。

「くそっ、俺は、こんな所で——」

「終わりだ」

赤き津波が、あたりを覆い尽くす。

ランスはそれを見届けると、大きな一息をつく。

「ふう……後始末といくか」

だがそこで、彼はある異変に気付いた。

溶岩が、まるで何かに吸い込まれるように急速に減っている。

「……バカな」

なぜだ。これらの制御は俺がしているはず。今は何の指示も出していない。

何が起きている。

ランスがうろたえる間にも溶岩は減り続け、ついには消えてなくなる。

後に残るは1人の人間。

ベイシスが、そこに立っていた。

「ま、まだ、終わって……ない、ぞ」

決着の章

かなり息苦しそうに話すベイシス。

「なぜ、生きている……」

「“基礎”の力は、空間を、操る能力。その、可能性は無限。

溶岩なら、“凝縮”した」

そして手の平に乗った小さな赤い玉を見せる。

「……お前如きにはできるはずがない」

「じゃあ、教えてやる」

ピン、と指で玉を弾くベイシス。

ランズが一瞬気を取られた隙に、全力で体当たりをした。

後ろに吹っ飛んだランズは、溶岩の噴出で空いた大穴に落ちる。

続けて同じように落ちていく玉が一つ。

3秒後、彼はつぶやいた。

「帰れ」

大きな火柱が立ち昇る。

同時に、ベイシスは意識を失った。

「うっ……」

「あら、生きてたの」

女の声がする。

「命拾いしたようね」

聞き覚えのある声だ。

「ゼン、か……？」

「そうよ。私はクラン・ゼン。成世拓実、いえ、ベイシス。あなたはよくやった」

「俺は、いったい」

目をうっすらと開けてみる。

ここはどこだろう。

なぜここにいるのだろう。

分かるのは、自分が横になっていることのみ。

「どう、なってる？」

「あなたは悪魔の卵として、今まで“ハンター”と戦っていた」

……思い出した。それから、

「結果は成功。見事に敵を倒して“力”を証明した」

「じゃあ」

「よってあなたが悪魔となることは確定した」

「完全なる、悪魔……だったっけ」

「その通り」

なるほど。

戦いは終わった。

俺はいよいよ人間を捨て、悪魔になるのだ。

.....だがそこで、疑問符が浮かぶ。

「なあ、ゼン」

「ん？なに？」

「もし、悪魔になったら.....どうなるんだ？」

ゼンは、ふっとほほえみ。

「今は未来より現在を心配しなさい。あなたの体、力の使い過ぎでボロボロなのよ」

「えっ、それって大丈夫なのか？いてて.....」

ベイススは体に痛みを感じる。

「回復にそう時間はかからないと思うけど.....まあしばらく休むといいわ」

「そうか。なら、ちょっと休ませてもらうよ」

「.....じゃ、また会う時まで」

ゼンは片手を彼の目の上に当てる。

「おやすみなさい」

ベイススの姿は、すでになかった。

一人残った悪魔は、立ちあがって背伸びをする。

だがそこで、急に何かを感じ取った。

これは.....魔力。

あらゆる感覚の何より強く、魔力を感じる。

どうやらまた、人間の誰かが“力”に目覚めたようだ。

「.....ふっふ」

悪魔の姿は、間もなく消えた。

終